九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シェイクスピアは『ファヴァシャムのアーデン』の作者か ： 印象批評と計量文体解析

太田, 一昭

https://doi.org/10.15017/4104140

出版情報：言語文化論究. 45, pp.15-34, 2020-10-30. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

シェイクスピアは『ファヴァシャムのアーデン』の作者か
――印象批評と計量文体解析――

太　田　一　昭

1．アーデン殺人事件、史書の記録、戯曲創作・出版

1551年２月15日午後７時ごろ、ファヴァシャムの地主トマス・アーデン（Thomas Arden）が自宅の居間で殺害された（Wine xxxviii）。殺害者は、アーデンの妻アリス（Alice）と愛人モスビー（Mosby）とその共謀者たちであった。ある史料によれば、アーデンは56歳、アリスは28歳であった（Wine xxxvii）。この殺人事件の顛末は、アーデンの町が作成した報告書（The Wardmote Book of Faversham）に記録されている。事件は、露見した当初から世の耳目を引いた。ロンドンの仕立て屋の Henry Machyn が日記（事件から１か月後の1551年３月14日）に、モスビーとモスビーの妹とがスミスフィールドで処刑されたと記している。

> The xiiij day of Marche was hangyd, in Smyth-feld, on John Mosbe and ys syster, for the death of a gentyll man of Feyversham, one M. Arden the custemer, and ys owne wyff was decaul..... and she was burnyd at Canturbery and her sarvand hangyd ther, and ij at Feyversham and on at Hospryng, and nodur in the he way to Canturbery, for the death of M. Arden of Feyversham. [and at Flusshyng was bernyd Blake Tome for the sam deth of M. Arden.]（Machyn 4）

この事件は歴史家の関心も引いたようである。事件後ほどなくして刊行された *Breviat Chronicle*（A breuiat cronicle contaynynge all the kinges from brute to this daye [Prynted at Canterbury: In Saynt Paules parysh by Iohn Mychell] 1552）の1551年の項に、簡単な記事が掲載されている。

> This yeare on .S. Valentines / daye at feuersham in Kent was co- / mytted a shamefull mourther for / one Arden a gentilmnan was by the / consente of hys wyfe mourthered / wherfore she was brent at Canter- / bury, and there was one hanged in / Chaynes for that mourther, and at / Feuersham was .ii. hanged in chay / nes, and a woman brente, and in / smithfelde was hanged one Mos- / by and his syster for the same mu[r-] / ther also.（Blayney 336）

記事によると、アーデンは、その妻の同意のもとに殺害され、その恥ずべき殺人のためにアリスはカンタベリーで焚刑に処せられた。この殺人事件はさらに、もっと重要な歴史家ホリンシェッドの眼にとまり、その年代記（1577年初版、1587年増補版）に詳細に記述されることになった。この公的な歴史を記述する書物に、家庭内のプライベートな出来事が記述されるのは異例であったようで、

著者は、身の毛もよだつような事件であったがゆえにある程度詳細に記述してしかるべきと判断し、事件の情報を骨折って収集した人々からさまざまな教示を受けたと「弁明」している。

> The which murther, for the horriblenesse thereof, although otherwise it may séeme to be but a priuate matter, and therefore as it were impertinent to this historie, I haue thought good to set it foorth somewhat at large, hauing the instructions deliuered to me by them, that haue vsed some diligence to gather the true vnderstanding of the circumstances. （Holinshed 1062）

周知のように、『ファヴァシャムのアーデン』（Revels 版、New Mermaids 版などの現代版では全18場）の材源は、このホリンシェッドの『年代記』である。『アーデン』の内容は材源にほぼ一致しており、劇はアリスがその愛人と夫アーデンの殺害を画策し、殺し屋を雇ってアーデンを殺害するまでを描いている。史実のアーデンは、ヘンリー八世とエドワード六世治下の下級官吏であったようだ。アーデンは修道院の解散後その土地を下賜され、ファヴァシャムの町で有力な市民となった。劇では、サマセット公爵の後ろ盾があって国王特許状を下付され、ファヴァシャムの修道院が所有していた土地を獲得したことになっている。アーデンは正当な手続きで土地を取得したと思っているが、アーデンに土地を奪われたとされる人物グリーン（Greene）が登場する。グリーンはアーデンに怨恨を抱いており、アーデン殺害の企てに手を貸す。殺し屋として二人の男（ブラックウィル［Black Will］とシェイクバッグ［Shakebag］）が雇われるが、その仲介者となるのがグリーンである。アーデン殺害の首謀者のモスビーは、クリフォード卿（Lord Clifford）の執事である。モスビーは卑しい生まれの仕立て屋であったが、クリフォード卿の庇護を得て、その執事におさまっている。この執事とアーデンの妻が愛人関係にある。アーデンは二人の関係を疑っており、悶々と悩んでいる。材源では、アーデンは妻の不貞を黙認している。夫がアリスの不貞を黙認していた理由についてホリンシェッドは、アーデンは（不倫を不問にすれば）妻の「友人」たちから得られる「利益」を（妻を怒らせることによって）失いたくなかったからだと記している（Wine 149）。史実のアーデンはかつてノース卿（Sir Edward North）に仕えていて、そのコネでいわば出世して経済的に有利な地位（ファヴァシャム港の税関の監督官）を得ているのであるが、妻のアリスは実はノース卿の義理の娘であった。つまりアリスとの結婚はアーデンに財をもたらしたとも言えるわけで、アーデンは妻との決定的な破綻は避けたかったのであろうと推測される。劇にはそういう妻の縁故関係の「史実」は描かれていないが、妻の愛人の後ろ盾となっている有力者（クリフォード卿）の存在がアーデンの苦悩にかかわっていることが示唆されている。アーデンは第１場で、モスビーを引き立てて執事にしたクリフォード卿が自分を嫌っていると友人のフランクリン（Franklin）に語るが、それがアーデンの苛立ちを募らせているようである。なお、クリフォード卿は、虚構の人物である。

センセーショナルな事件が娯楽として消費されるのは、世の常である。年代記にアーデン殺人事件が記録されたのも、それが読者の好奇心に訴え、読者を楽しませることができる（つまり、本が売れる）という判断があったからだろう。事件から四半世紀経過したころにはすでに、この殺人事件を素材にした本が書かれていた可能性がある。というのも、ホリンシェッドの年代記初版が出版された1577年に、Edward White が “A cruell murder donne in Kent” の出版権を獲得している（出版登録日は７月１日、登録料は４ペンスと出版物１部）からである（Arber 314）。この出版物は現存せず、それがいかなる内容であったのか不明である。それはあるいは通常の書籍ではなくバラッドで

あったかもしれない。

1579年３月３日、サセックス伯一座が *Murderous Michael* という芝居をエリザベスの宮廷で上演した記録が残っている（Chambers 96）。これは、アーデン殺人事件を扱った芝居であったかもしれない（Chambers 4）。ただし、これには異論もある（Wine xliii）。『アーデン』に描かれたマイケル（Michael）はアーデンの臆病な下僕である。殺人者の一味に加わるが脇役であって、殺人を主導できる人物ではないから、彼を主人公にした芝居はありえないという反論である。

アーデン殺人事件はその後も、さまざまな記録に現れる。例えば1587年出版のホリンシェッドの『年代記』第２版、John Stow の *Annals of England*、Thomas Heywood の *Troia Britannica*（1609）に掲載されている（Wine xxxviii）。さらに1633年には、“[The] complaint and lamentation of Mistresse Arden of [Fev]ersham in Kent” というバラッド（broadside ballad）が出版されている。

このようにアーデン殺人事件は、長きにわたって人々の興味を引く出来事であった。事件発生から約40年後の1592年、これをを素材とする悲劇『ファヴァシャムのアーデン』（*The Lamentable and True Tragedy of M. Arden of Feversham in Kent*）が出版された。正確な創作年は不明だが、1592年４月３日に “The tragedie of Arden of Feuersham and Blackwall” が出版登録され（Arber 607）、同年に出版されていることから、1590年～91年頃に創作された可能性が高いと考える学者が多い。（この戯曲の登録・出版者は、“A cruell murder donne in Kent” の登録者と同一人物、つまり Edward White である。）Harbage は最有力年を1591年としているが、推定創作年の可能性として1585年～1592年（89年の改訂版では1588年～1592年）の幅を持たせている（Harbage 56）。Wiggins は創作推定年範囲を1587年～92年、最有力年を1590年としている（Wiggins 9）。いずれにせよ、Shakespeare の最初期の劇作品とほぼ同時期に執筆されたと考えられる。

1592年に出版された『アーデン』のタイトル・ページには、長大な標題が印刷されている。

> THE LAMENTABLE AND TRVE TRAGEDIE OF M. ARDEN OF FERVSHAM IN KENT. Who was most wickedlye murdered, by the meanes of his disloyall and wanton wyfe, who for the loue she bare to one Mosbie, hyred two desperat ruffins Blackwill and Shakbag, to kill him. VVherin is shewed the great malice and discimulation of a wicked woman, the vnsatiable desire of filthie lust and the shamefull end of all murderers.（*Arden of Feversham*）
> （不実・不貞の妻によって残酷に殺害された、ケント州ファヴァシャムのアーデン氏の痛ましい真実の悲劇。妻はモスビーという男に対して抱く恋情ゆえに、二人の命知らずの悪党ブラックウィルとシェイクバッグを雇い、夫を殺害。本劇は、邪悪な女の大悪と偽装、悍しい肉欲の飽くなき欲望と謀殺者たち全員の恥ずべき最期を描出。）

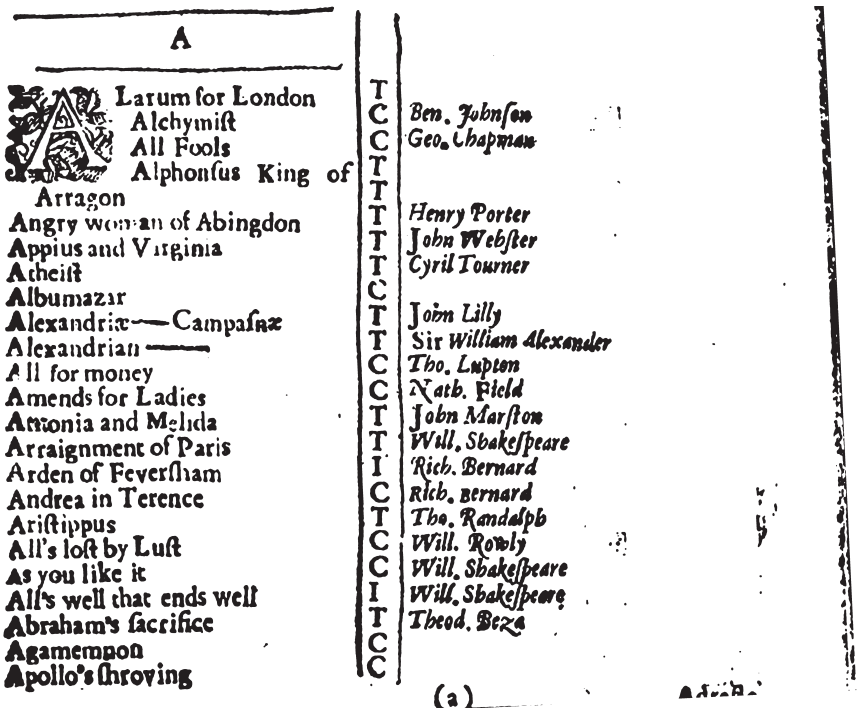
現代の週刊誌の煽情的な広告文のような趣である。このセンセーショナルな内容の本は、かなり売れたのだろうと思われる。1592年に初版が出版された後、1599年には第２版、1633年には第３版が出版されている。この３つの版以外にも、Abell Jeffes なる書籍商が（White が版権を持つ）『アーデン』を不法に出版して処罰された記録（Greg 9）があるが（印刷された本はすべて没収、罰金10シリング）、その版本は現存しない。

前置きが長くなったが、ここから本題に入る。この『アーデン』を誰が書いたのかという問題である。これまで Kyd や Marlowe や Shakespeare などが候補者として挙がっているが、本稿では、Shakespeare が『アーデン』を書いた可能性に絞って考察する。これを検討する理由は、周知のよう

に、最近刊行された *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works*（以下 *NOS* と略称）の編者たちが、『アーデン』の作者として Shakespeare を強く推していることに疑念を抱くからである。

2.『ファヴァシャムのアーデン』の作者同定 ── 印象批評から計量文体解析へ

『アーデン』初版（1592）のタイトル・ページには、作者の名前は印刷されていない。この作者不明の戯曲が特定の作者と初めて関連づけられたのは、1656年だとされる。この年に発行された戯曲 *The Old Law* の巻末に付せられた、Edward Archer による戯曲刊本カタログにおいて、『アーデン』は Richard Bernard（ケンブリッジ大学クライスツ・カレッジのピューリタン牧師）作となっている。


A

Larum for London — T
Alchymist — C — Ben. Johnson
All Fools — C — Geo. Chapman
Alphonsus King of Arragon — T
Angry woman of Abingdon — T — Henry Porter
Appius and Virginia — T — John Webster
Atheist — T — Cyril Tourner
Albumazar — C
Alexandria — Campaspe — T — John Lilly
Alexandrian — T — Sir William Alexander
All for money — C — Tho. Lupton
Amends for Ladies — C — Nath. Field
Antonia and Melida — T — John Marston
Arraignment of Paris — T — Will. Shakespeare
Arden of Feversham — I — Rich. Bernard
Andrea in Terence — C — Rich. Bernard
Aristippus — T — Tho. Randolph
All's lost by Lust — C — Will. Rowly
As you like it — C — Will. Shakespeare
All's well that ends well — I — Will. Shakespeare
Abraham's sacrifice — T — Theod. Beza
Agamemnon — C
Apollo's shroving — C

(a)

Archer, “An Exact and perfect CATALOGUE of all the PLAIES that were ever printed”（1656）.

W. W. Greg によると、『アーデン』の作者が Bernard と印刷されているのは印刷（植字工）のミスである。本来 *Arraignment of Paris* の作者は Shakespeare ではなく Peele と印刷し、Shakespeare の名は『アーデン』の行に印刷すべきであった（“Shakespeare and *Arden of Faversham*” 134）。テレンティウスの喜劇の英訳者として知られる Bernard が『アーデン』の作者というのはまずありえず、Greg の指摘が正しいと思われるが、出版者 Archer のリストには間違いが多く、その記載を全面的に信じることはできないというのが定説である。しかし Greg の判断が正しいとすればの話だが、Archer はなんらかの理由があって、あるいは私たちが知らない根拠に基づいて『アーデン』の作者は Shakespeare だと考えた可能性はある。

Archer のカタログが掲載された *The Old Law* 出版から100年以上経過した1770年、ファヴァシャ

ムの歴史家 Edward Jacob が編集した『アーデン』が出版された。Jacob はその序文（The Preface）において、作者を Shakespeare と主張している（Jacob vi）。Jacob は、『アーデン』と Shakespeare 劇の間に多くのパラレル（類似の）表現が現れることを作者判定の根拠としている。この Jacob の作者判定によって、『アーデン』はシェイクスピア外典（Shakespeare Apocrypha）の仲間入りをしたと言えるかもしれないが、その作者判定は権威を得ることはできなかった。1812年に刊行された *Biographia dramatica* において、Stephen Jones は、Jacob の作者判定をばかげていると一蹴している。というのも Jacob が指摘している類似表現は、エリザベス朝演劇に普通に見られるフレーズだからである（Wine lxxxiv; Kinney 82）。

19世紀以降、『アーデン』の作者をめぐる議論が増えていく。Shakespeare と『アーデン』を結びつける決定的外的証拠は存在しないから、Shakespeare 作者説を提唱する人々は、内的証拠つまり作品が優れていることを Shakespeare 作の根拠とするしかない。彼らは、1592年の時点で、悲劇としてこれだけ成熟した作品を書けるのは、我々が知っている劇作家である可能性が大きいという前提に立って作者探しをする。そうしてアリスやモスビー、彼らに雇われる殺し屋のブラックウィルやシェイクバッグ、さらにはアーデンの下僕のマイケルの性格描写が優れていると言う。あるいはブラックウィルやシェイクバッグといった悪党の造形にブラックユーモアがあると指摘する。あるいは悲劇の予兆のような場面が挿入され、アーデンの死は宿命であるかのように描かれていることが Shakespeare を思わせると言う（Bayne vii-x）。さらには韻文のスタイルとかイメジャリの使い方が初期の Shakespeare に似ていると主張されることもある（Kinney 87-88）。

このように様々な角度から Shakespeare 作を支持する意見が提唱されているが、『アーデン』が Shakespeare の「正典」（canon）に加えられることは従来なかった。Shakespeare 作だとする外的証拠がないことに加えて、作品の質が Shakespeare とは異なるという感覚があったからだろうと思われる。E. K. Chambers は、『アーデン』の作者問題に関連して、「劇は悲劇としては優れているが、Shakespeare の特徴をそなえていない。Shakespeare の発展という観点から、1592年より前に書かれたこの劇の作風を合理的に説明することは不可能だ」と記している（Chambers 4）。Chambers の評語は約100年前のものであるが、今日でもこれに賛同する学者は多い。つまり多くの学者は、『アーデン』Shakespeare 執筆説に懐疑的である。そのような状況に大きな一石を投じたのが、2016年に刊行された *The New Oxford Shakespeare* である。*NOS* は、『アーデン』をシェイクスピアの「共作」として、この全集に収載したのである。周知のように、20世紀の後半以降 Shakespeare の「正典」は拡大する傾向を見せている。現在では、*The Two Noble Kinsmen* は言うまでもなく、*Edward III* を Shakespeare の「共作」として、Shakespeare の「正典」に加えることに抵抗を覚えない学者も多くなっている。しかし『アーデン』の「外典」から「正典」への昇格に *NOS* がお墨付きを与えたのは、驚きである。*NOS* の編者たちは、どうしてこのような大胆な決定をなしえたのか？ この決定に与って力あったのはおそらく、20世紀の後半以降、特に21世紀に入ってから盛んになった、コンピューターを利用した統計学的な作者判定方法である。

統計学的な解析方法によって Shakespeare の関与を立証しようとする学者たちは、その統計学的な解析の前提として、『アーデン』には Shakespeare の筆致がうかがえるという感覚を持っている。例えば次の台詞がそうである。これはグリーンの台詞である。グリーンは、アーデンに土地を奪われて、アーデンを恨んでおり、殺人者たちのグループに加わっている。そのグリーンが、ブラックウィルとシェイクバッグに語る台詞である。彼らはアーデンを殺害しようと待ち伏せしている。ブラックウィルはピストルを持っている。

Well, take your fittest standings, and once more
Lime well your twigs to catch this weary bird.
I'll leave you, and at your dag's discharge
Make towards, like the longing water-dog
That coucheth till the fowling-piece be off,
Then seizeth on the prey with eager mood.
Ah, might I see him stretching forth his limbs
As I have seen them beat their wings ere now. (*Arden of Faversham*, ix. 38-45)

それじゃ一番いい場所に隠れて、もう一度小枝に
しっかりと鳥もちを塗り、あのくたびれた獲物を仕留めてくれ。
ここは任せるぞ。俺は銃声が聞こえたら勢いよく飛び出し、
脇目も振らず獲物を捕まえるだろう、猟銃が発射されるまで
はやる気持ちを抑えてじっと伏せていた猟犬のように。
ああ、これまでカモが羽をばたつかせているのは何度も見たが、
あの男が大の字にくたばっているのを見たいものだ。

この台詞について Arthur Kinney は、M. P. Jackson を引用しつつ、このヴィヴィッドで細かい狩猟のイメージに比肩しうるものは、『アーデン』出版以前の10年間に劇作をしていた Shakespeare 以外の劇作家（Christopher Marlowe, Thomas Kyd, George Peele, Robert Greene, Joh Lyly, Thomas Lodge, Thomas Nashe, Robert Wilson, Anthony Munday その他）の作品には存在しないと言う（Kinney 88）。これに似ているくだりが Shakespeare にはあると Kinney は言う。次の*1 Henry VI* のトールボット（Talbot）の台詞である。

How are we park'd and bounded in a pale,
A little herd of England's timorous deer,
Maz'd with a yelping kennel of French curs!
If we be English deer, be then in blood,
Not rascal-like to fall down with a pinch,
But rather, moody-mad and desperate stags,
Turn on the bloody hounds with heads of steel,
And make the cowards stand aloof at bay. (*1 Henry VI*, 4.1. 45-52)

我らは狩場に追いこまれて包囲された鹿も同然だ――
わずかばかりのイングランドの臆病な鹿が、
フランスの野良犬どもに吠え立てられてどうにもならぬ！
イングランドの鹿なら、元気を出すのだ、
役立たずの鹿のように噛まれたくらいで倒れず、
向う見ずな牡鹿のように猛り狂い、
血に飢えた猟犬に刀の角をふりかざして襲いかかり、
臆病者どもを寄せ付けず、追いつめるのだ。

似ていると言えば似ているが、私には似て非なるもののように思われる。しかしこれは私の印象に過ぎないかもしれない。Kinney が引用している Jackson は、オクスフォード大学の学生時から『アーデン』の研究に取り組んでいる研究者である。彼は1963年にオクスフォードに提出した Bachelor of Letters の学位論文において、Shakespeare が『アーデン』の執筆者であると主張している。Jackson は特に、『アーデン』の第 8 場は Shakespeare によって書かれた可能性が大きいと力説する。彼の主張は次の引用に端的に現れている。

> In early Elizabethan drama, outside the Shakespeare canon, only the final scene of *Doctor Faustus* matches it [the famous quarrel scene between Alice Arden and her lover Mosby] for its combination of sheer theatrical effectiveness, poetic merit, psychological depth, and emotional power; and, while it is characteristic of Marlowe that his scene requires a solo performance by the hero who so dominates his play, the author of *Arden of Faversham* places his two chief characters in an intensely dramatic conflict that anatomizes the volatile relationship between them. (Jackson, "Shakespeare and the Quarrel Scene" 249)

Jackson によれば、アリスとモスビーの「有名な口論の場面」は非常に高い演劇性を備えていて、韻文も優れ、心理的に深く、感情に訴える力を持っており、この場面に匹敵するのは、Shakespeare を除けば、*Doctor Faustus* の最終場だけである。

Jackson は *NOS* チームの重要なメンバーであり、Shakespeare の『アーデン』執筆説を支持する人々には、作者同定の権威となっているようである。ちなみに、Eric Rasmussen は Jackson の *Determining the Shakespeare Canon: "Arden of Faversham" and "A Lover's Complaint."* の書評において、Jackson の調査には（全体の見取り図が変わるほど）エラーが多いとしているが、なぜか批判の筆を抑制しているように見える。Rasmussen は、周知のように、RSC（Royal Shakespeare Company）の Shakespeare 全集（*Complete Works*）の編者の一人である。*NOS* の編者の Taylor=Loughnane によれば（Taylor and Loughnane 489)、RSC Shakespeare 全集の編者の Bate=Rasmussen は第 8 場を Shakespeare 作として、RSC Shakespeare 全集のウェブサイトにその場を掲載しているという。確かに掲載はされている。そのサイトには、Bate による解説文が併せて掲載されている。しかし Bate は、第 8 場を Shakespeare 作だと断定しているわけではない。

> To date, stylometric tests have not resolved the authorship question satisfactorily, but largely because of such tests opinion is leaning more strongly towards at least a partial Shakespearean hand than at any time since the late nineteenth century, when such major Shakespeareans as Charles Knight and A. C. Swinburne [a]rgued powerfully for his authorship of the play. (Bate, "A Possible Shakespearean Scene from *Arden of Faversham*")

Bate は、「現在までのところ、計量文体的検証により作者問題について満足のいく解答は得られていないが、主としてそのような検証によって、19世紀後期以降どんな時代よりも、少なくとも Shakespeare が部分的にこの劇を執筆している意見が優勢になっている」と書いている。しかし Bate 自身がこの問題についてどう考えているかは、明確に述べられていない。Shakespeare によって書かれた可能性がある（a possible Shakespearean scene from *Arden of Faversham*）としているだけである。

Bate と Rasmussen 共編の *William Shakespeare and Others: Collaborative Plays*（2013）には、『アーデン』の全テクストが収載されている。その序文（Bate and Rasmussen 5）には、第 8 場を Shakespeare 作とする Jackson の説が紹介されている。また『アーデン』の作者について様々な説が存在していることも記されている。しかし編者たちは、『アーデン』の作者についての判断は留保している。

私自身の「印象」では、第 8 場を含めて、『アーデン』は Shakespeare 作ではない。その理由の一つは、喜劇の作り方が Shakespeare 的ではないと思われるからである。『アーデン』とその材源の違いの一つは、悲劇『アーデン』には「笑劇」が挿入されているということである。暗殺者たちがアーデン殺害に何度も失敗するのは材源も劇も同じであるが、劇中の殺し屋たちの失敗は、笑いを喚起するように描かれている。最初の失敗は、セント・ポール大聖堂の境内でのしくじりである。ブラックウィルはシェイクバッグと一緒に、ロンドンに出てきたアーデンを殺害しようと、本屋とおぼしき境内の店の軒先で待ち伏せるが、その徒弟（prentice）が（時間が遅くなり、大聖堂から群衆が出てくると泥棒が増えるので）店の窓を閉めたところ、その窓がブラックウィルの頭を直撃して、ブラックウィルは傷を負う（第 3 場）。ブラックウィルは徒弟と言い争っているうちに、アーデンを逃してしまう。またアーデンがシェピー島（the Isle of Sheppy）のチェイニー卿（Lord Cheiny）の邸に向かうときに二人は殺害を試みるが、濃霧のために道に迷い、アーデンを逃してしまう。逃げられるだけでなく、シェイクバッグが水路に落ちて溺れそうになる（12 場）。こういうストーリーはホリンシェッドにはない。作者は明らかに笑いを取ろうとしてこういう場面を創出している。しかしこういう笑いの取り方は、Shakespeare のようではない。

『アーデン』が Shakespeare 的でないと感じるもう一つの理由は、Shakespeare 劇に頻出する言葉遊びあるいは機知を戦わせる場面が『アーデン』にはほとんどないということである。次の引用は *Richard III* の一節である。これは、リチャードがアンと丁々発止のやりとりをした後に発する台詞である。

Richard I know so. But, gentle Lady Anne,
To leave this keen encounter of our wits,
And fall something into a slower method:（*Richard III*, 1. 2. 118-20）
リチャード　そうなるとも。レイディ・アン、
こうして鋭い機知をぶつけあうのはやめにして、
もっとおだやかに話しあおうではないか。

『アーデン』には、こういう「機知合戦」の場が非常に少ない。次の引用は、その数少ない一例である。

Alice It is not love that loves to anger love.
Mosby It is not love that loves to murder love.（*Arden of Faversham*, viii. 57-58）
アリス　愛があれば、愛する人を怒らせたいとは思わないでしょう。
モスビー　愛があれば、愛する者を殺したいとは思わないだろう。

Jackson であれば、これを Shakespeare 的だと指摘するかもしれないと思って調べると、果たして指摘していた。Jackson によれば、これは「若いシェイクスピアに典型的な（typical of the young Shakespeare）」台詞である（“Shakespeare and the Quarrel Scene” 266）。次の引用はアリスとモスビー

のやり取りに似ているとされる、*The Two Gentlemen of Verona* の台詞である。

Julia. His little speaking shows his love but small.
Lucetta. Fire that's closest kept burns most of all.
Julia. They do not love that do not show their love.
Lucetta. O, they love least that let men know their love. （*Two Gentlemen of Verona*, 1.2. 29-32）
ジュリア　口数が少ないのは愛が小さい証拠でしょう。
ルーセッタ　周囲を閉ざされた火は強く燃えるものでしょう。
ジュリア　愛を外に示さない人は内にも愛がないのだわ。
ルーセッタ　愛をひけらかす人は愛が小さいのですわ。

似ているといえば似ているが、似て非なるものである。Shakespeare のキャラクターのソフィスティケートされた当意即妙のやりとりに比べれば、『アーデン』の人物のそれは素朴である。

『アーデン』には、アーデンの下僕であるマイケルという若者が登場する。マイケルは、モスビーの妹スーザンと結婚したいがために殺人者たちのグループに加わる。Shakespeare の初期の作品人物の中でマイケルに近い人物は、*The Two Gentlemen of Verona* では、ヴァレンタイン（Valentine）の小姓スピード（Speed)、プローテュース（Proteus）の召使で犬を連れているラーンス（Launce)、あるいは *The Comedy of Errors* ではドローミオ（Dromio）であるが、マイケルは Shakespeare のキャラクターのように機知縦横ではなく、口達者でもない。『アーデン』は悲劇であって喜劇ではないから、マイケルが駄洒落を飛ばす人物である必要はないわけで、実際マイケルは、笑いを誘うというより同情を誘う、悪人になりきれない臆病な男として描かれている。だからといって、マイケルに喜劇的なところがないわけではない。マイケルは、スーザンをめぐって画家のクラークと恋のさや当てを演じる（第10場)。これは喜劇的と言えば喜劇的である。しかし二人の喧嘩は、アーデン殺害という大事の前の愚かしい笑劇的な仲間割れである。マイケルとクラークの諍いは、シェイクバッグとブラックウィルの喧嘩（第９場）── ブラックウィルの悪行の自慢話に我慢ならなくなったシェイクバッグがブラックウィルを嘲弄したことから、二人は争う ── とパラレルを成す内輪もめである。この諍いは、*Henry IV, Part 1*における、グレンダワー（Glendower）の自慢と魔術や領土の分割案をめぐってのホットスパー（Hotspur）との対立を髣髴とさせる。そういう意味では、Shakespeare 劇とは全く別物というわけではない。しかし『アーデン』の笑いは、笑劇のレベルにとどまっている。

シェイクバッグとブラックウィルという二人の殺し屋は、『アーデン』においては道化的な役回りである。Shakespeare の初期の作品に登場する道化的な人物といえば、上述の『ヴェローナの二紳士』のラーンスである。彼はスピードと滑稽なやりとりをする。Shakespeare の道化的な人物と『アーデン』の道化的な人物は明らかに、笑いのヴェクトルが異なる。ラーンスやスピードといった、Shakespeare のキャラクターの台詞はウィットが利いているが、そのような機知のひらめき、さらには Shakespeare 劇に頻出する性的な戯言は、『アーデン』にはほとんどない。ほとんどないということは、少しはあるということである。第11場にアーデンをシェピー島に渡す船頭（Ferryman）が登場するが、彼はアーデンと友人のフランクリン相手に、濃霧は煩い妻のようだと軽口をたたき、「月という女性の性器は、いろんな満ち欠けがあるんです（Ay, and it hath influences and eclipses［11. 25］)」と言う。アーデンはそれに対して、「そう考えると君は時々その月の中で遊ぶんだろう（Why, then, by this reckoning you sometimes play the man in the moon?［11. 26-27］）と答える。ブラックウィ

ルは、濃霧の中でアーデンを待ち伏せているときに、相棒のシェイクバッグに「こんなに霧の濃い天気は人妻と駆け落ちしたり、娘と前戯をやるのにもってこいじゃないか？（Black Will “Didst thou ever see better weather to run away / with another man’s wife, or play with a wench at potfinger? [12. 7-8]）」と言う。しかし性的戯言があるといってもこの程度であり、Shakespeare 劇に比べると僅少である。

Jackson たちが Shakespeare 作の可能性が大きいとする、『アーデン』の第 8 場には次のようなやりとりがある。これはアリスがモスビーと、いわば痴話喧嘩をしたときに発する言葉である。

Wilt thou not look? is all thy love overwhelmed?
Wilt thou not hear? What malice stops thine ears?
Why speaks thou not? What silence ties thy tongue?
Thou hast been sighted as the eagle is,
And heard as quickly as the fearful hare,
And spoke as smoothly as an orator,
When I have bid thee hear or see or speak,
And art thou sensible in none of these?（*Arden of Faversham*, viii. 123-30）

もうわたしを見てくれないの？ あなたの愛はすっかり消えてしまったの？
もうわたしの話を聞いてくれないの？ どんな恨みがあって耳を塞ぐの？
なぜ黙っているの？ 口がきけなくなってしまったの？
あなたは、わたしが見てくれるように頼むと鷲のように鋭い目で見た、
聞くように頼むと、臆病な兎のようにすばやく耳を傾けた、
話すように頼むと雄弁家のように流暢に話した。
あなたは見ることも、聞くことも、話すこともできなくなったの？

これがどうして Shakespeare 的なのか、私には理解が難しい。大仰で拙劣なレトリックの韻文としか思えない。もちろん Shakespeare にも大仰な比喩を用いた韻文はいくつもある。たとえばオセロー（Othello）の台詞がそうである。しかしオセローの台詞は、オセローのキャラクターと行動様式と釣り合いがとれている。いわゆる客観的相関物がある。しかしアリスの台詞はそうではない。劇中の彼女の行動とそこから見える彼女の性格とこの台詞とが乖離していて、迫真性を欠いている。この解釈はもちろん、私の印象である。しかし従来『アーデン』が Shakespeare の正典に加えられなかったのは、もちろん外的な証拠がないことが大きいのであるが、『アーデン』の構成、性格描写、そしてその文体が Shakespeare 的ではないと感じる学者が多かったからである。このように一方に Shakespeare 作だとする学者がいる。他方にそうではないと感じる学者が存在する。個々の学者の印象で判断する限り、両者の論争の決着はつかない。そこで存在感を増してきたのが統計学的な文体解析による作者判定である。『アーデン』が Shakespeare の作品（共作）と判定されて *NOS* に収載されるに至ったのは、統計学的な文体解析の成果によるところが大きい。

３．*New Oxford Shakespeare* の計量文体解析（統計学的文体分析）による作者判定

NOS の編者・学者たちの作者判定方法は、*The New Oxford Shakespeare: Authorship Companion*

(2017) に詳述されている。彼らが用いている統計学的な解析方法は多岐にわたる。多くはコンピューター・プログラムを利用して言語資料を収集・解析するものであるが、昔から行われているような「手作業」により解析しているものもある。ただし「手作業」による解析もすべて、コンピューターを利用してデータを収集・整理している。

NOS の編者・学者たちが作者判定に用いている解析方法は、例えば次のようである。

> Delta, Nearest Shrunken Centroid, Random Forests, Zeta, Principal Component Analysis, Shannon Entropy, etc.

この他に、希少語の出現頻度比較、韻律の作家間比較のような比較的伝統的な作者判定方法も用いられているが、多くは一般の文学研究者には難解な多変量解析等の計量文体学的な解析方法である。*NOS* の編者・学者にとって、コンピューターによる統計学的文体解析はきわめて有力な作者判定方法であるようだ。彼らは、統計学的な解析によって決定的な作者同定を達成したかのような論調を展開している。「素人」には反証が困難な解析方法を用いて、自分たちの作者判定を権威づけしているようにさえ見える。このような *NOS* の編者・学者たちの姿勢には批判がある。批判の急先鋒となっているのは、在野の Shakespeare 研究者 Pervez Rizvi である。Rizvi の来歴は公開されておらず不詳であるが、コンピューター・プログラミング、統計学に通暁した数学者である。Shakespeare 研究に関しては、"Evidence of Revision in *Othello*" (*Notes and Queries* 45.3) を皮切りに書誌学関係論文を少なくとも 10 編公刊している。その多くは、作者同定研究に関するものである。Rizvi は、*NOS* の統計学的作者同定の手法を痛烈に批判している。

> The *NOS* have now been found out. I have shown their incompetence with the simplest of the methods. It means that the rest of their computational stylistics work has no credibility now and people need not be in awe of it. Scholars who have felt unease at what the *NOS* have done, but have been hesitant about challenging it, can rejoice. Their good sense, based on deep knowledge of literature and the early modern period, is worth more than the badly done computational work that the *NOS* is based on. (Pervez Rizvi, "Attribution Studies Article," Shakesper, 8 Sep. 2018)

Rizvi の言わんとするところを要約すれば、次のようである。*NOS* の編者たちの計量文体分析の手法はまことに杜撰であり、その作者同定の議論に説得力はない。彼らは文学研究者一般がコンピューターによる文体解析に不案内であることにつけ込み、怪しげな統計処理によって自分たちの本文編纂を権威づけようとしているが、実は簡単な統計解析方法さえ理解していない無能の輩である。

Rizvi 以上に激しい批判を展開しているのは、Brian Vickers である。*NOS* は *Henry VI* 三部作の一部を Marlowe 作とし、*Titus Andronicus*、*Measure for Measure*、*All's Well that Ends Well*、*Macbeth* に Middleton の筆が入っているとしているほか、『アーデン』の一部を Shakespeare が書いたと判定している。Vickers は、これらは編者のひどい誤判定であると酷評し、後世の人々はどうしてこのような悲惨な間違いが起こったのかと驚くであろうと述べている。Vickers によれば、その間違いの因って来るところは、虚栄心、傲慢、そして検証されていない不適切な方法を軽率に信用したことにある ("Valedictory")。

私は Rizvi のような数学と統計学の素養を欠いており、Vickers のような初期近代演劇に関する膨

大な知識もないが、両者の所見が正しいと考える。*NOS* の編者たちは、コンピューターを用いた計量文体解析によって Shakespeare の共作問題に決着がついたかのように主張している。計量文体解析があたかも、作者同定の難問を解決してくれる魔法の杖のようである。しかし計量文体解析により Shakespeare の共作の作者同定が確実にできるというのは、少なくとも現時点では神話である。以下において、『アーデン』の作者同定に関する *NOS* の計量文体解析の問題点を具体的に検証する。

４．計量文体解析による『ファヴァシャムのアーデン』の作者同定

Authorship Companion には２編の『アーデン』の作者同定論考が掲載されている。一つは、２名の学者（Elliott and Greatley-Hirsch）による共著論考である。彼らの解析の基本資料は、語頻度（word frequency）データである。彼らはまず、９劇作家の（1587年から1594年までに初演されたと推定される）戯曲計34編中に含まれる全単語の出現頻度、機能語（function words）の出現頻度、頻出語500語の出現頻度等を調査し、作家別の「プロフィール」（各作家の特徴を表す、数値化された言語資料）を作成する。他方、『アーデン』を35の “rolling segments” に分けて、同様の言語データを抽出する。１セグメントの語数は、2,000語である。（“rolling segments” とは、他のセグメントとオーバーラップする語を含むセグメントのことである。第１セグメントは戯曲の1-2,000語、第２セグメントは501-2,500語、第３セグメントは1,001-3,000語である。こうして計35のセグメントができる。）次に各セグメントのデータと９劇作家の「プロフィール」とを比較し、そのセグメントの作者を推定する。このときに解析者たちが用いる統計学的判定方法は、Delta、Nearest Shrunken Centroid、Random Forests と呼ばれるものである。*NOS* の編者・学者たちはさらに、特定の作家の作者指標語（marker words）500語を抽出し、『アーデン』の35セグメントと、上掲の判定方法で有力候補と判定された５劇作家のサンプル戯曲のセグメントにおける作者指標語の出現頻度を調査し、そのデータに基づいて『アーデン』の各セグメントの作者を推定する。（５劇作家のサンプル戯曲も2,000語のセグメントごとに調査される。ただし、このセグメントは、オーバーラップなしのセグメントである。）この時に用いられる作者判定方法は、Zeta テストと称されるものである。さらに『アーデン』の作者最終候補を３名（Kyd、Marlowe、Shakespeare）に絞り、この３劇作家について上掲の言語資料と解析方法（および頻出語500語と機能語出現頻度データを用いた主成分分析）によって再解析を行い、最終判断を下す。その結論によると、『アーデン』は Shakespeare の単独執筆か（Shakespeare を主たる作者とする）他劇作家との共作である。

もう一編の論考は、M. P. Jackson によるものである。Jackson の解析は、コンピューターを用いた計量文体解析の先行研究の成果に立脚しており、彼自身コンピューターを使ってデータの収集・計算・整理を行っているが、難解な統計学的手法を用いているわけでもなく、コンピューター・プログラムを用いた統計解析を行っているわけでもない。その手法は、昔から行われている、いわば手作業による統計的分析に近い。Jackson は、先行研究に基づいて、シェイクスピア・マーカー５語（Shakespeare-plus-words: *gentle*, *answer*, *beseech*, *spoke*, *tonight*）と非シェイクスピア・マーカー４語（Shakespeare-minus-words: *yes*, *brave*, *sure*, *hopes*）を選定する。次いで1580年から1600年までに執筆されたと推定される（現存の）全戯曲137編における両マーカー語の出現頻度を調査し、戯曲ごとにシェイクスピア・マーカー語の相対的出現率を算出する。出現率は、シェイクスピア・マーカー語出現数を、シェイクスピア・マーカー語出現数と非シェイクスピア・マーカー語出現数の和で除した後、100を乗じた数値（パーセント）で表される。Shakespeare 劇は全体として、Shakespeare 以

外の作家の戯曲より有意に高い数値を示す。このデータ分析結果に加えて、『アーデン』と他の戯曲間の（比較的出現頻度の小さい）連語の一致データに基づいて、『アーデン』は Shakespeare の「共作」であり、特に第４場から第９場は Shakespeare 作の可能性が大きいと結論する。

５．*NOS* の統計学的作者同定方法の問題点

NOS チームによる『アーデン』の作者判定方法は、おおよそ以上のようである。計量文体学や統計学的作者同定研究に詳しい研究者であれば上の説明で十分理解可能であるが、一般の文学研究者が理解をするのは難しいかもしれない。実は私自身、理解できない点が多々ある。例えば Elliott=Greatley-Hirsch の Random Forests による作者判定がどのような手順で行われたのか、その解析方法の原理は理解できるものの、具体的な生データが提示されていないこともあり、その判定結果の当否を私は判断できない。しかし、解析のプロセスの詳細は不明でも、彼らの判定方法は明らかに不適切であるように思われる。というのも、彼らの解析資料選択が恣意的であって、信頼できる解析結果が得られるとは到底考えられないからである。先に述べたように、*NOS* の学者たちはさまざまな解析方法を駆使している。あたかも多様・多数の解析方法の解析結果が彼らの作者同定の正しさを証明していると言いたいかのようである。しかし、多重の解析を行ったからといって、より正確な作者同定ができるとは限らない。統計学的な判定作業において決定的に重要なのは、適切な解析資料の選択である。いかに優れた解析方法であれ、解析の対象となる言語資料に偏りがあれば、信頼できる解析結果は得られない。*NOS* チームの解析は、ここに最大の問題がある。

Elliott=Greatley-Hirsch は、解析基礎資料として９劇作家による戯曲計34編から言語データを抽出している。彼らは Shakespeare を『アーデン』の作者の最有力候補と判定したが、その判断の根拠となったデータは Shakespeare の初期の４作品から抽出されている。*The Two Gentlemen of Verona*（1590）、*The Taming of the Shrew*（1591）、*Richard the Third*（1592）、*The Comedy of Errors*（1594）の４戯曲である（カッコ内の数字は推定初演年）。解析者たちがこの４作品を選んだのは一見、合理的である。というのもこの４戯曲は、『アーデン』とほぼ同時期に書かれた作品であるからである。同時期に執筆された他の作品としては、*Henry VI* 三部作がよく知られている。しかし *Henry VI* 三部作は、Shakespeare が他の劇作家と共同執筆した可能性が高い「共作」である。したがって、解析者たちが *Henry VI* から言語資料を抽出して Shakespeare の「プロフィール」を作成しなかったのは当然である。しかし彼らが選定した４作品が『アーデン』創作初演時の Shakespeare の言語的特質を代表しているかどうかは実は、分からない。比較対照戯曲のジャンルの違いも問題である。*Richard III* は歴史劇である。他の作品は喜劇である。一方『アーデン』は「家庭悲劇」と分類される悲劇である。これで本当に、『アーデン』と Shakespeare の係わりの有無が確認できるのか疑わしい。というのも、作品のジャンルが異なると使用言語も異なるのが通例であるからである。Elliott=Greatley-Hirsch は、この４戯曲が『アーデン』の作者判定の基礎資料としてのシェイクスピアの「プロフィール」を作成するための最適の作品であることを数値で示す必要がある。

残りの８人の劇作家のサンプル戯曲は、比較対照テクストとして現存する単独執筆戯曲がほぼすべて選ばれている。ただし、作家によってその数にはばらつきがある。Lyly は８戯曲、Marlowe は５戯曲（*Dr. Faustus* は含まれない）、Kyd は３戯曲（Kyd のオリジナル戯曲ではなく、Kyd による［Robert Garnier の仏語原作の］英訳 *Cornelia* を含む）、Greene は４戯曲、Peele は５戯曲、Wilson は３戯曲、Lodge と Nashe は、それぞれ１戯曲である。*NOS* は、これらの Shakespeare および他の

同時代劇作家の戯曲34編からなるコーパスのデータの分析に基づいて、『アーデン』の作者（あるいは主たる作者）はShakespeareと判定したのであるが、そのコーパスの構成から判断する限り、解析結果に全幅の信頼を置くことは到底できない。わずか1編の戯曲から得られた作家のデータが解析基礎資料として適切でないのは言うまでもないが、数編の作品から抽出されたデータがその作家の特徴を正確に表しているとは限らない。というのも、少数の戯曲サンプルであれば、そのサンプルの選択によって、解析結果の変動が大きくなる可能性が大きいからである。[1]

Jacksonの解析は、Elliott=Greatley-Hirschよりかなり多い137編の戯曲のデータを用いている。この中にはShakespeareの戯曲（単独執筆作品および共作）23編と作者不明の29編が含まれている。Jacksonは、シェイクスピア・マーカー語の出現率を重視する。最も重要な分岐点（Borderline A）は、（それ以上の数値であれば誤判定が少ないとされる）68.5パーセントである。Shakespeareが執筆した可能性が高いとされる第4場から第9場までの平均は86.7パーセント、その他の平均は57.9パーセントである。したがって、第4場〜第9場はShakespeare作の可能性が高いと判定される。

Jacksonの解析には問題点が多い。計量文体解析においてサンプル戯曲数が多いのは一般的には好ましいことであるが、Jacksonは自分の結論に合致するデータを収集・解釈しているように私には見える。JacksonのShakespeareのサンプル戯曲は、Elliott=Greatley-Hirschでも使われている（Shakespeareの初期の）4編の戯曲を含んでいる。その4戯曲のシェイクスピア・マーカー語の出現率は、*Richard III*が83.8パーセント、*The Two Gentlemen of Verona*が64.9パーセント、*The Comedy of Errors*が59.5パーセント、*The Taming of the Shrew*が59.0パーセントである。このようにばらつきがあるのであれば、平均値による判定は不合理だと思うのであるが、あえてこの4戯曲の平均値を求めると66.8パーセントとなる。つまりサンプル戯曲の選択によって、第4場〜第9場の数値は、初期の（つまり『アーデン』創作初演時の）Shakespeareにしては、高すぎるという解釈も成立する。

Jacksonが判定に用いているマーカー語は、シェイクスピア・マーカー語と非シェイクスピア・マーカー語を合わせて9語である。わずか9語の出現頻度に基づく作者判定がはたして信頼できるものであろうか。前述のRizviは、“Small Samples and the Perils of Authorship Attribution for Acts and Scenes”において、「Jacksonが用いている9単語という、わずかなサンプルによる判定結果は信頼できない」と断じている。Rizviは実際、Jacksonの方法でどの程度正確に作者判定ができるかを検証している。Jacksonがシェイクスピア作の可能性が大きいと判定した『アーデン』の第4場〜第9場の語数は4,647（頭書とト書きを除く）である。Rizviは、シェイクスピア戯曲38編（*The Noble Kinsmen*を含む）と1580年から1600までに創作された他劇作家の戯曲とをそれぞれ4,647語のセグメントに分けて、JacksonのBorderline A（68.5パーセント）によってシェイクスピア作か否かの判定を試みた。それによると、多数のシェイクスピア劇のセグメントがシェイクスピア作ではないと判定され、他の劇作家の作品のかなりの数のセグメントがシェイクスピア作と判定された。Rizviは、シェイクスピア作と判定された他劇作家作品のセグメント数を示していないが、シェイクスピア作については、36セグメントがシェイクスピア作ではないと判定された。これらのセグメントの総語数は187,000である。シェイクスピア作ではないと判定されたセグメントを含む作品は、次の通りである。

> *Hamlet, The Merry Wives of Windsor, As You Like It, The Comedy of Errors, The Merchant of Venice, Julius Caesar, The Taming of the Shrew, The Two Gentlemen of Verona, Henry IV, Part 1, Much Ado About Nothing, Henry IV, Part 2, Love's Labor's Lost, and Henry V.*

Hamlet のセグメント数は 6 である。他の12戯曲のセグメント数を Rizvi は明示していないが、最大語数の *Hamlet* が 6 、最小語数の *The Comedy of Errors* が（私自身の調査によれば） 3 であることからすると、上掲13作品の総セグメント数は50前後であろうと推定される。となれば、過半数のセグメントがシェイクスピア作と同定されなかったということである。13作品は、*The Taming of the Shrew* を除いて、すべてシェイクスピア単独執筆作品とされるものである。他の25の（他劇作家との共作を含む）シェイクスピア戯曲については正しくシェイクスピア作と同定されたとしても、上掲の単独執筆作品の判定精度が50パーセントに満たない Jackson の方法が妥当と言えるかは、疑問である。

Jackson は、自説を補強するために Hugh Craig and Arthur F. Kinney, eds. *Shakespeare, Computers, and the Mystery of Authorship*（2009）および本論文集所載の Kinney の論考を引用している。Kinney は Jackson と同じく『アーデン』について Shakespeare 共作説を提唱しているが、Jackson の解析データは部分的に、Kinney のそれと対立する。Jackson によれば第 4 場〜第 9 場は「明白に（unequivocally）」Shakespeare 作である（“A Supplementary Lexical Test” 193）。特に第 8 場は Shakespeare 作の可能性が非常に大きい（190）のであるが、Kinney の解析結果（シェイクスピア・マーカー語、非シェイクスピア・マーカー語出現頻度データに基づく Zeta テスト結果）は Shakespeare 以外の作家の執筆部分である可能性が大きいことを示している（“Authoring *Arden of Faversham*” 93）。Jackson は、このように Kinney の解析が自身の解析結果と矛盾する点を含んでいることには触れていない。一方 Jackson が援用している Kinney にも問題がある。Kinney の最終結論は、Jackson と同じく、第 4 場〜第 9 場が Shakespeare 作の可能性が大きいということであるが、Kinney は自分の解析結果を結論に合うように強引に解釈しているように私には思われる。というのも Kinney のデータには彼自身の結論と矛盾するものが含まれているのであるが、それについて説得的な論証は見えないからである。「大半は正しく同定されている（The vast majority are correctly assigned）」（93）と述べるだけでは、論証とは言えない。[2]

Elliott=Greatley-Hirsch の解析結果（179-80）も、Jackson の主張とは異なり、第 8 場の作者が Shakespeare であることを「明白に」示すものではない。逆に、Jackson の解析では Shakespeare 作ではないことが示唆される場（第 4 場〜第 9 場以外の場）の多くが Shakespeare 作であることを示している。Elliott=Greatley-Hirsch と Jackson は、*NOS* チームの学者として自分たちの解析結果が微妙に異なることは認識しているはずである。にもかかわらず、そのような齟齬については沈黙している。

以上、*NOS* の作者同定の問題点について、『アーデン』の解析を一例として検証した。他の作品の解析にも同様の問題がある。[3] にもかかわらず、*NOS* の編者・学者たちは、計量文体解析が作者同定問題の最終解答になりえるかのような議論を展開している。しかし、計量文体解析によって作者同定問題に決着がつくというのは幻想である。私たちは、少なくとも現時点では、計量文体解析によって Shakespeare 時代の作者不詳の戯曲の作者同定を確実に行うことはできないことを認識する必要がある。これについては、稿を改めて論じたい。その論考では、前出の数学者 Rizvi が構築した初期近代英国演劇連語データベースと検証プログラムとを活用する予定である。[4] わが国で Rizvi のデータベースを利用している英文学研究者はほとんどいないと思うが、それは作者同定のツールとして非常に有用である。そのデータベースを傍証として、*NOS* の作者判定方法がいかに脆弱なものであるかを明らかにしたいと考えている。

注

本稿は、平成31年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究課題番号16K02452）による研究成果の一部である。

1 Elliott=Greatley-Hirsch の解析は、上述のように、解析に使われた生データが公開されておらず、第三者が解析結果を検証することはできない。解析結果の一部は、表あるいは散布図によって提示されている（Elliott and Greatley-Hirsh 154, 156-58, 160-63, 165, 167-71, 173-78, 180）。解析者たちは自信たっぷりに結論を下しているが、その表と散布図は、彼らが主張するほど明確な結論を導き出せるデータを示していないように私には見える。しかしこの点について説得的に論証するには、別稿が必要である。ここでは、彼らの解析結果は解析される戯曲サンプルの選択によって判定が変わる可能性が大きいと指摘するにとどめる。*NOS Authorship Companion* の統計学的作者同定方法の不適切については、Auerbach 参照。

2 第 9 場は、Jackson の解析方法によれば、Shakespeare 作と判定できる「明白な」データは得られない。私自身の調査によれば、シェイクスピア・マーカー語の出現率は60パーセントである。つまり Borderline A を下回っている。

3 『二重の欺瞞』（*Double Falsehood*）の作者同定方法の問題について、太田、「『二重の欺瞞』の作者同定と文体統計解析」参照。

4 Rizvi のデータベースについては、太田、「Pervez Rizvi の初期近代英国演劇連語データベース」参照。

引 用 文 献

"The Account of Thomas Arden's Murder from the Wardmote Book of Faversham, ff. 59-60." Wine 160-63.

Arber, Edward, ed. *A Transcript of the Registers of the Company of Stationers of London; 1554-1640 A.D*. Vol. 2. London, 1875.

Archer, Edward. "An Exact and perfect CATALOGUE of all the PLAIES that were ever printed; together, with all the Authors names; and what are Comedies, Histories, Interludes, Masks, Pastorels, Tragedies." *The excellent comedy called, The old law, or, A new way to please you by Phil. Massinger, Tho. Middleton, William Rowley*. London, 1656. 77-92. *Early English Books Online*. ProQuest.

Arden of Feversham. London, 1592. *Early English Books Online*. ProQuest.

Auerbach, David Benjamin. "Statistical Infelicities in *The New Oxford Shakespeare Authorship Companion*." *A Quarterly Journal of Short Articles, Notes and Reviews*. Published online: 21 Jan 2019. Advance Access Article. Web. 1 March 2019. <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/0895769X.2018.1559023>.

Bate, Jonathan. "A Possible Shakespearean Scene from *Arden of Faversham*." Web. 20 July 2019. < https://www.macmillanihe.com//resources/pdfs/rsc-shakespeare/arden-of-faversham.pdf>.

Bate, Jonathan, and Eric Rasmussen, eds. *The RSC Shakespeare: Complete Works*. Macmillan, 2007.

———, eds. *William Shakespeare and Others: Collaborative Plays*. Palgrave Macmillan, 2013.

Bayne, Ronald, ed. *Arden of Feversham*. J. M. Dent, 1897.

Blayney, G. H. "*Arden of Feversham*—An Early Reference." *Notes and Queries* 200 (1955): 336.

Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. Vol. 4. Clarendon P, 1923.

"[The] complaint and lamentation of Mistresse Arden of [Fev]ersham in Kent who for the loue of one Mosbie, hired certaine ruffians and villaines most cruelly to murder her husband; with the fatall end of her and her associats. To the tune of, Fortune my foe." London, 1633. *Early English Books Online*. ProQuest.

Craig, Hugh, and Arthur F. Kinney, eds. *Shakespeare, Computers, and the Mystery of Authorship*. Cambridge UP, 2009.

Elliott, Jack, and Brett Greatley-Hirsch. "*Arden of Faversham*, Shakespearean Authorship, and 'The Print of Many'." Taylor and Egan, *Authorship Companion* 139-81.

Greg, W. W. *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration*. Vol. 1. Bibliographical Society, 1939.

———. "Shakespeare and *Arden of Faversham*." *Review of English Studies* 21 (1945): 134-36.

Harbage, Alfred. *Annals of English Drama, 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. 2nd ed. Methuen, 1964.

Holinshed, Raphael. *The Third volume of Chronicles, beginning at duke William the Norman, commonlie called the Conqueror; and descending by degrees of yeeres to all the kings and queenes of England in their orderlie successions*. 2nd ed. London, 1587. *Early English Books Online*. ProQuest.

Jackson, M. P. *Determining the Shakespeare Canon: "Arden of Faversham" and "A Lover's Complaint."* Oxford UP, 2014.

———. "Shakespeare and the Quarrel Scene in *Arden of Faversham*." *Shakespeare Quarterly* 57.3 (2006): 249-93.

———. "A Supplementary Lexical Test for *Arden of Faversham*." Taylor and Egan, *Authorship Companion* 182-93.

Jacob, Edward. Preface. The lamentable and true tragedie of M. Arden, of Feversham, in Kent. Who was Most wickedlye murdered, by the Means of his disloyall and wanton Wyfe. London, 1770. iii-vi. *Eighteenth Century Collections Online*. ProQuest.

Kinney, Arthur F. "Authoring *Arden of Faversham*." Craig and Kinney 78-99.

Machyn, Henry. *The Diary of Henry Machyn, Citizen and Merchant-Taylor of London, 1550-1563*. Ed. J G Nichols. London, 1848. British History Online. Web. 6 July 2019. <http://www.british-history.ac.uk/camden-record-soc/vol42>.

太田一昭．「『二重の欺瞞』の作者同定と文体統計解析」．*Shakespeare Journal* 4 (2018): 11-23.

———.「Pervez Rizvi の初期近代英国演劇連語データベース」.『言語文化論究』42号 (2019)：17-38.

Rasmussen, Eric. Rev. of *Determining the Shakespeare Canon: "Arden of Faversham" and "A Lover's Complaint*," by M. P. Jackson. *Shakespeare Quarterly* 66.2 (2015): 226-29.

Rizvi, Pervez. "Attribution Studies Article." Shakesper, 8 Sep. 2018. <https://www.shaksper.net/archive/2018/827-september/32577-pervez-rizvi-attribution-studies-article-4>.

———. "Evidence of Revision in *Othello*." *Notes and Queries* 45.3 (1998): 338-43.

———. "Small Samples and the Perils of Authorship Attribution for Acts and Scenes." *A Quarterly Journal of Short Articles, Notes and Reviews*. Published online: 13 Nov 2018. Advance Access Article. Web. 1 December 2019. <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/0895769X.2018.1537841>.

Taylor, Gary, and Gabriel Egan, eds. *The New Oxford Shakespeare: Authorship Companion*. Oxford UP, 2017.

Taylor, Gary, John Jowett, Terri Bourus, and Gabriel Egan, eds. *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works*. Modern Critical Edition. Oxford UP, 2016.

Taylor, Gary, and Rory Loughnane. "The Canon and Chronology of Shakespeare's Works." Taylor and Egan, *Authorship Companion* 417-602.

Vickers, Brian. "Valedictory," Shakesper, 19 July 2019. Web. 20 July 2019. <https://www.shaksper.net/current-postings>.

White, Martin, ed. *Arden of Faversham*. 1982. A & C Black, 2007. New Mermaids.

Wiggins, Martin, in association with Catherine Richardson. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. 3: 1590-1597. Oxford UP, 2013.

Wine, M. L., ed. *The Tragedy of Master Arden of Faversham*. Manchester UP, 1973. Revels Plays.

The Question of the Shakespearean Authorship of *Arden of Faversham*: Impressionistic Analysis and Stylometric Attribution

Kazuaki OTA

Shakespeare has long been named as one of the possible authors of *Arden of Faversham*, an anonymous play presumed to have been written around 1590-91. Although most Shakespeare scholars have been skeptical of his involvement in the play, the editors of *The New Oxford Shakespeare*, published in 2016, decided to include the play as one of Shakespeare's co-written works in the collection. What was instrumental in this decision was the method of computational stylistics used for authorship attribution. The present paper examines the validity of the *NOS* scholars' decision to assign authorship of part of *Arden* to Shakespeare, arguing that their attribution using the computer-assisted stylometry lacks statistical reliability and fails to prove his part-authorship of the play.

This paper first examines whether *Arden* has Shakespearean characteristics in terms of its dramatic structure, characterization, and verse style, suggesting that Shakespeare is unlikely to have written *Arden*. It then reviews two stylometric articles by three scholars of the *NOS* team who argue for inclusion of *Arden* in their newly published collection as Shakespeare's co-work: "*Arden of Faversham*, Shakespearean Authorship, and 'The Print of Many'" by J. Elliott and B. Greatley-Hirsch and "A Supplementary Lexical Test for *Arden of Faversham*" by M. P. Jackson.

Elliott and Greatley-Hirsch have used thirty-four plays (including four of Shakespeare's earliest plays) to create the "profiles" of nine "candidate" playwrights who were active around the time of composition of *Arden*. The profile of each playwright is generated using the word frequency data extracted from the play or plays he wrote. These authorial profiles, which Elliott and Greatley-Hirsch claim represent the nine playwrights' respective stylistic characteristics, are compared for authorship identification. However, they can hardly be considered an appropriate basis on which to determine the authorship of *Arden*, because the sample sizes of control texts used for generating the profiles of the nine playwrights are too small for Elliott and Greatley-Hirsch's research results to be accepted as statistically reliable. Another problem with their "authors-profiles" is that the sample sizes of the nine playwrights vary greatly from one author to another. It is doubtful that the linguistic data collected from a corpus of samples of such unequal size can reasonably be used for authorship attribution.

Jackson's analysis uses a corpus of 137 plays of the period 1580-1600, which includes twenty-three Shakespearean plays and twenty-nine of unknown authorship. His attribution is based on the frequency of occurrence of five "Shakespeare-plus-words" and four "Shakespeare-minus-words" in these plays. He calculates the relative frequency of the Shakespeare marker words for each play. He sets one of the most important "borderlines" for classifying Shakespeare and non-Shakespeare plays at 68.5 per cent (Borderline

A), claiming that any play or scene with a score above this borderline is likely to have been written by Shakespeare. He suggests that since *Arden* as a whole scores 66.0 per cent, closely matching *Edward III* (66.7 per cent), one of Shakespeare's co-authored plays, Shakespeare very likely had a hand in the play, and that scenes 4-9 of *Arden*, "with their exceptionally high score of 86.7 percent," can be unequivocally classified as Shakespeare's. It is, however, difficult to agree with Jackson's conclusion because there are a number of problems with Jackson's attribution methodology. His corpus includes those four plays of well attributed single authorship by Shakespeare which are used in Elliott and Greatley-Hirsch's analysis. Three of the four score below Borderline A, indicating that there is something wrong with Jackson's statistical attribution. In addition, Jackson's attempt to identify authorship using the frequency of occurrence of only nine words causes suspicion of the validity of his method. No analysis based on the data extracted from such a tiny sample of words is expected to provide much statistical reliability.